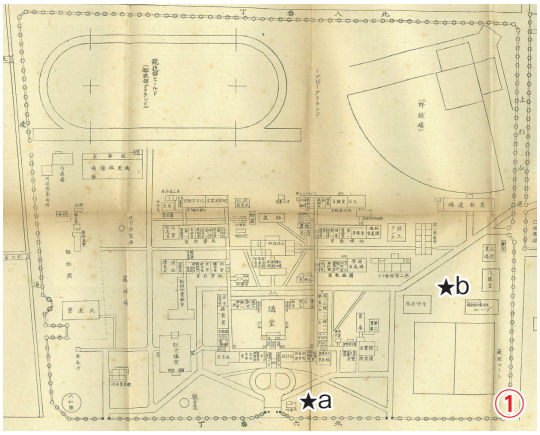
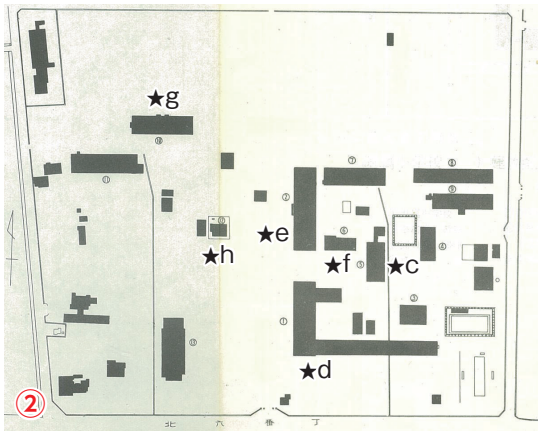
ISSN 1347-6211

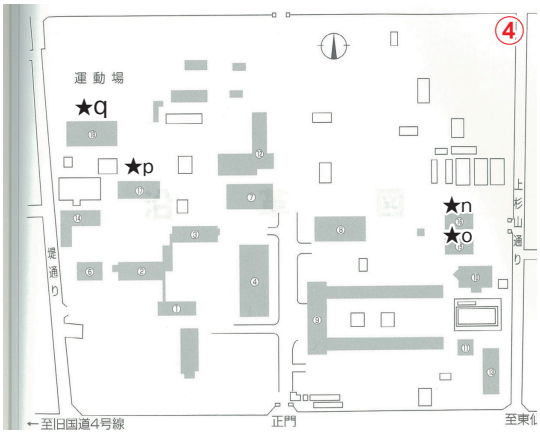
東北大学史料館だより

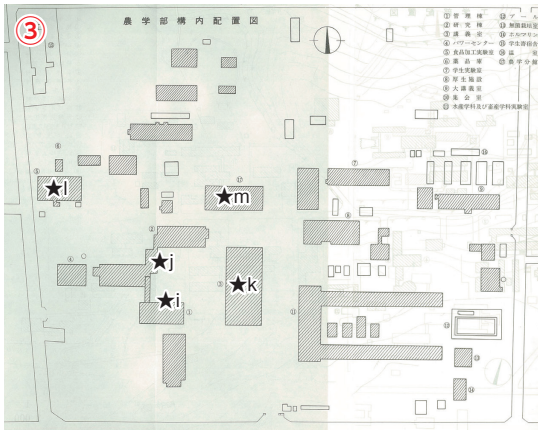
No.26
2017 Mar.

TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER









Index

2 農学部草創期の雨宮キャンパスの思い出
元東北大学教授 竹内昌昭
5 雨宮キャンパス今昔アルバム
7 資料の公開について 史料館のうごき
8 企画展を開催しました

写真：
①1943年頃の第二高等学校建物配置図（『第二高等学校一覧』昭和８～18年度）
②1958年頃の農学部建物配置図（『東北大学一覧』昭和24～33年度）
③1979年の農学部建物配置図（『東北大学要覧』昭和54年度）
④2003年の農学部建物配置図（『東北大学要覧』2003年度）

雨宮キャンパスの建物の移り変わり いつの地図かわかりますか？

2017年に農学部が青葉山キャンパスへの移転を終え、閉鎖となる雨宮キャンパスにも、様々な学び舎が建ち、そして消えていった歴史がありました。①は旧制第二高等学校時代の1943年頃の配置図です。そのほとんどは1945年の空襲で燃えてしまいましたが、配置図にみえる門衛所（★a）やプール（★b）は現在まで残され利活用されてきました。②は1958年頃、農学部が北六番丁に開設され９年程経た時期の配置図です。1949年にかなりの紆余曲折を経て移転が決定した農学部は、戦後の混乱期にあって建物や実験設備も不十分な状況に見舞われましたが、川渡農場の厩舎一棟を移し講義室として改築したり（★c）、旧制二高の建物を改造、また田圃をつくるために全職員、学生を動員して整地を行うなど努力をかさねていきます。その後、二号館（★f）、一号館（★e）など木造建物が先行して建ち、1952年に本館（初の鉄筋コンクリート建造物 ★d）の第一期工事が始まって以降、冷害実験室（★h）、水族飼育実験室（★g）などつぎつぎと整備されていきました。

③は1979年のものです。1971年度以降新たな施設整備計画のもと多くの建物が増改築され、建物面積は14,099㎡まで増えます。近年の主要な建物としてある第一研究棟（★j）や管理棟（★i）、講義棟（★k）のほか、食品加工実験室（★l）や農学分館（★m）なども揃えられました。さらに2003年にあたる④では、③の２倍以上の30,726㎡にまで建物面積が増加しました。農学研究科研究棟として施設（★n・o・p）を増やしたり、講堂（★q）が建てられてほぼ現在のかたちとなります。

本号では旧制二高が建ってから90年以上経過し、今まさに東北大学にとって最後の時をむかえている雨宮キャンパスの歴史について特集します。

農学部草創期の雨宮キャンパスの思い出

元東北大学農学部教授　**竹　内　昌　昭**

永年の懸案であった農学部の設置は太平洋戦争後に実現し、1947年４月、東北帝国大学５番目の学部として、３学科７講座で発足した。しかし、農学部は専用の用地や校舎がなく、他部局に間借りして９月１日に開講した。

馬小屋から始まった雨宮キャンパス

話は遡るが、戦争末期の1945年７月、米軍の空襲により第二高等学校（旧二高）の殆ど（約８割）が焼失し、敗戦で廃校となった仙台陸軍幼年学校三神峯校舎に移転した。

1949年１月に旧二高跡地の北六番丁（現雨宮）キャンパスが農学部用地に決定し、翌２月に川渡農場より旧軍馬用厩舎（馬小屋）を移築し、４講座を擁する農産学科研究棟に充てられた。農学部が自前で建てた最初の校舎であり、創立から２年を経て雨宮キャンパスで第一歩を踏み出したのである。

敗戦から２年に満たない創設当時、国家財政は疲弊し、政府から「寄付を財源とする施設整備」が求められていた。しかし、戦後の財閥解体や農地解放などの社会情勢下では、かつてのように資産家に頼れる状況ではなかった。そこで、戦火を免れた僅かの旧二高施設を活用することになった。

利活用された旧第二高等学校施設

1987年、卒業以来約30年振りに、古巣の農学部水産学科に教授として赴任したが、この間に、旧二高起源の施設は殆ど無くなっていた。

往時の校舎に郷愁を覚え、本務の傍ら在学時まで遡って調べ始め、約10年かけて明らかになったことを基に、60年前の雨宮キャンパスにおける思い出を綴る。

筆者が学んだ頃の雨宮キャンパスの鳥瞰図を次ページに示した。学生がよく利用した馴染みの施設などの幾つかについて紹介する。以下、竣工時期の明示が無い施設は旧二高が片平丁から移転準備期間（1923～25年）に建造されたものである。

雨宮キャンパスに進級した1956年には、農産学科は農産学科研究棟（図ｄ竣工時期上述）から二号館（図ｅ二階建て 1950年竣工、延べ372㎡）に移動しており、研究室部分（350㎡）は小講義室と会議室に変わっていた。少人数の水産学科は、専らこの小講義室で講義を受けたが、窓枠が狭く天井が低い暗い部屋でした。北側の農場作業員室（図ｄ竣工時期上述、150㎡）は渡り廊下で繋がっており、ここに靴修理店があった。当時革製品は高価であり、靴底は何度も張り替えて履いていたので、ここには世話になった。

片平丁から移築した剣道寮（図Ｊ1923年竣工、258㎡）を学生食堂に改装し、このなかに調理場、学用品、日用品、パン、牛乳などを取り扱う売店、理髪店があった。

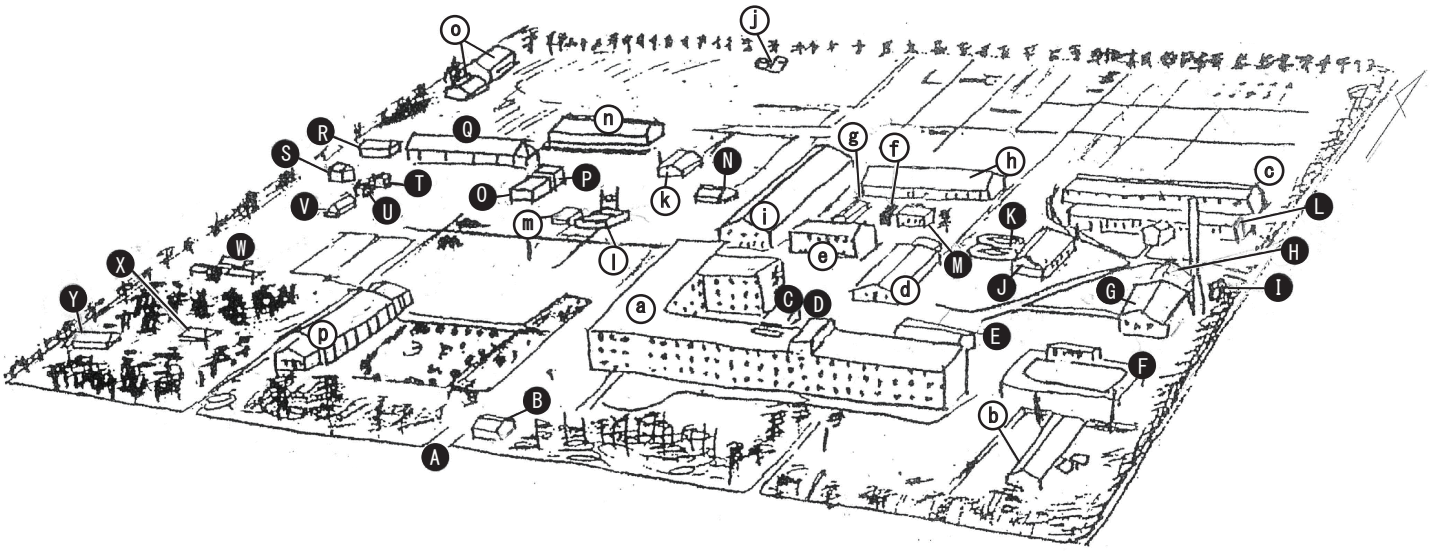
日常、写真を撮ることが少なかった時代であり、大学祭や運動会など学校行事の写真、入学や卒業シーズンには、構内の絵はがき、お世話になった教授や、学部長、学長らのブロマイドなども売店で販売されていた。

３年次（1957年）の３月、先輩の卒業論文発表会の前日午後から翌朝まで暴風雨と吹雪に襲われ、道路がぬかるみ長靴で登校した。土曜日の放課後（夕刻）とあって、ストーブに火の無い食堂でオーバーコートを羽織っての予餞会（僅かのつまみ付のビールパーティ）は、寒さにも拘らず熱気に溢れていた。

放課後、床が板張りの狭いホールは、コーラス、うたごえ広場やダンスパーテイの場に変わることもあっ

雨宮キャンパス開設10年目の農学部　鳥瞰図　1958年現在

竹内昌昭原図（1999）一部改変



（1）旧制第二高等学校由来の施設

A 校門（校門）
B 門衛所（門衛所）
C 書庫（書庫）
D 図書室（第二書庫）
E 旧事務室（卓球道場）
　1959年11月サイロ近くに移築.
　中動物実験室となる.
F プール（プール）
G 加工室・倉庫（汽罐室）
H 動物飼育室（石炭庫）
I ガラス細工室（校友会倉庫）
J 学生食堂・売店・理髪店（剣道寮）
K 池（漕艇用タンク）
L 大講義室（武道場）
M 電話交換室・受電室（物理特別実験室）
N 車庫（化学実験室）
　1959年３月現在地に移築
O アイソトープ実験室（蒸留室）
　1976年10月東側に増築
P 動物隔離室（第二薬品庫）
Q 収納庫（雨天体操場・銃器庫・銃工室）
　1954年２月一部取り壊し７割に縮小
R 弓道場（弓道場）
　1960年３月川内分校に移築
S 弓道巻藁射場（弓道巻藁射場）
T 便所（便所）
U 倉庫（園丁詰所）
V 温室.（植物温室）
W 浩寮（武道寮）
X 宿舎（職員集会所）
Y 六如寮（六如寮）
註 カッコ内に旧二高当時の名称を示す.
　W,X,Y は他部局の所管.

（2）新たに設けられた施設

a 本館
b 応急宿舎（通称水泳寮）
c ３号館（畜産学科研究棟）
d 小講義室・農学科作業員室
e ２号館（農学科研究棟）
f 亜炭置場
g 自転車置場
h 学生実験室（水産学科・畜産学科・農学科）
i １号館（生活科学科研究棟・事務棟兼用）
j サイロ
k 温室
l 冷害実験室
m 温室
n 水族飼育実験室
o 如春寮
p 講堂・会議室
註 i と p は宮城県の寄付建造物.
　b,o は他部局の所管.

※キャンパスを囲む道路は上辺より時計回りに、北八番丁、上杉山通（現愛宕上杉通）、北六番丁および堤通です。

なおこの鳥瞰図は、表紙の農学部建物配置図②とも対応しています。

た。当時の農学部は女子学生が少なかったことから、医学部附属看護学校の女子学生を勧誘していた。ここで芽生えたカップルが、のちに結ばれたという学生もいた。

三階建て書庫（図Ｃ延べ235㎡）はひときわ目だったが、急な狭い階段、窓も狭く暗かった。二階建て（図Ｄ1934年竣工、延べ92㎡）は図書掛事務室と閲覧室になっていた。

小さいながらも、よく利用されたガラス細工室（33㎡）には、３名の工員がおり、ガラス器具のオーダーメイドや修理をしていた。複雑な蛇管（冷却管）も作れたそうです。

冒頭で述べたように、農学部創設時には「寄付を財源とする施設整備」が求められており、宮城県から寄付された２棟は長いこと利用されてきた。

キャンパス中央南北に長い一号館（図ｉ木造二階建て1951年６月竣工、延べ1653㎡）は同年８月に寄付を受けている。木造バラック群の中でひときわ輝いており、撮影スポットになっていた。1976年と1982年の２回に分けて取り壊された。

もう１棟は講堂・会議室（図ｐ1949年竣工、655㎡）である。これは雨宮キャンパスに同居していた宮城県第一女子高等学校（当時）用に宮城県が建てた施設である。1953年に中島町（現青葉区八幡）に移転し、残存施設を1955年に寄付されたもので、2003年に代替施設が完成し、その役目を終えた。

３学科７講座で創設された農学部が、筆者３年次（1956年）には、５学科25講座に拡充されていた。当時、旧二高由来施設が20棟を超え、その数は農学部が設置した施設より多かった。ゼロからスタートした草創期の農学部の発展に、旧二高由来施設が大きく貢献したと言える。

なお、現存施設は、校門（図Ａ）、赤レンガ塀、門衛所（図Ｂ26㎡、築91年）、プール（図Ｆ1930年竣工、築86年）、車庫（図Ｎ1942年竣工、66㎡、築74年）、アイソトープ実験室（図Ｏ99㎡、築92年）である。

盛況だった農学部創立10周年記念農学祭

在学時は農学部創立10周年の節目に当たり、記念農学祭（３年次）や記念式典（４年次）が開催され、卒業生630名を含む翠生会会員名簿（Ａ５判42頁）も発行された（４年次）。

1956年11月の記念農学祭は筆者ら３年生が中心となり取り組んでいたので、今でも記憶が蘇ってくる。農場から運んできたトラクターが、自動車の往来が少ない街なかを走り回り、農学祭の街頭宣伝が奏功し、秋晴れの２日間に約4000人の市民が足を運んでくれた。倍数性を利用した作物の品種改良、模造真珠の展示、科学食などが参観者の目を引いていた。

当時、仙台市内は舗装道路が少なく、砂利道を荷馬車が闊歩し、トラクターもその仲間入りした。市の人口はまだ40万人に届かず、定禅寺通りにけやき並木が無かった時代のことである。

アットホームな雨宮キャンパス

記念農学祭では実行委員を務め、他学科の若い教職員とも顔見知りになり、構内で挨拶を交わすようになっていた。1987年の着任時には、在学時の筆者を知る教授数名に出会った。

４年になって配属された水産利用学講座では、講座主任の土屋教授のみを「先生」と呼び、他の教職員７名に対しては「さん」呼びでした。このような講座が多く、互いに親近感があった。なによりも、学生数が少なかったことが、アットホームな雰囲気を醸し出していたようだ。

ちなみに、1956年度学生一覧はＢ３判１枚で教養部の１・２年生を除く学生総数は281名でした。この名簿は研究室の壁に貼ってあり、活字も大きく（12フォント相当）、見易いものでした。対する現行の2016年度学生名簿はＡ４判63頁におよび、学生総数は1088名である。すなわち、60年前の雨宮キャンパスの学生総数は現在の約４分の１でした。

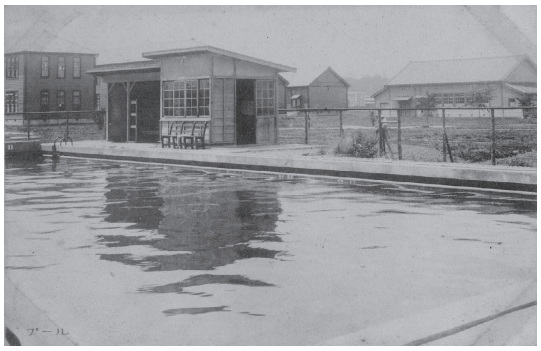
雨宮キャンパスの往昔アルバム

旧制第二高等学校時代

1929 年（昭和 4）以前　雨宮近郊から水田をはさんで北六番丁校舎を望む。周囲には田畑が広がっていた。

1929 年（昭和 4）以前　北六番丁校舎から正門を見下ろし校外に向けて撮影。左手に門衛所がある。

1932 年（昭和 7）11 月　キャンパスの東側にあった汽罐室煙突上から西南方面に向けて校舎を見下ろす。手前に図書館、中央に講堂、右には図画教室、右奥に地学教室がみえる。



1931年（昭和6）頃　1930年に竣工した水泳部のプール。
1937年に50センチメートル深くし、当時仙台市唯一の水泳公認プールとなった。

1945 年（昭和 20）7 月　空襲被災後の北六番丁校舎。

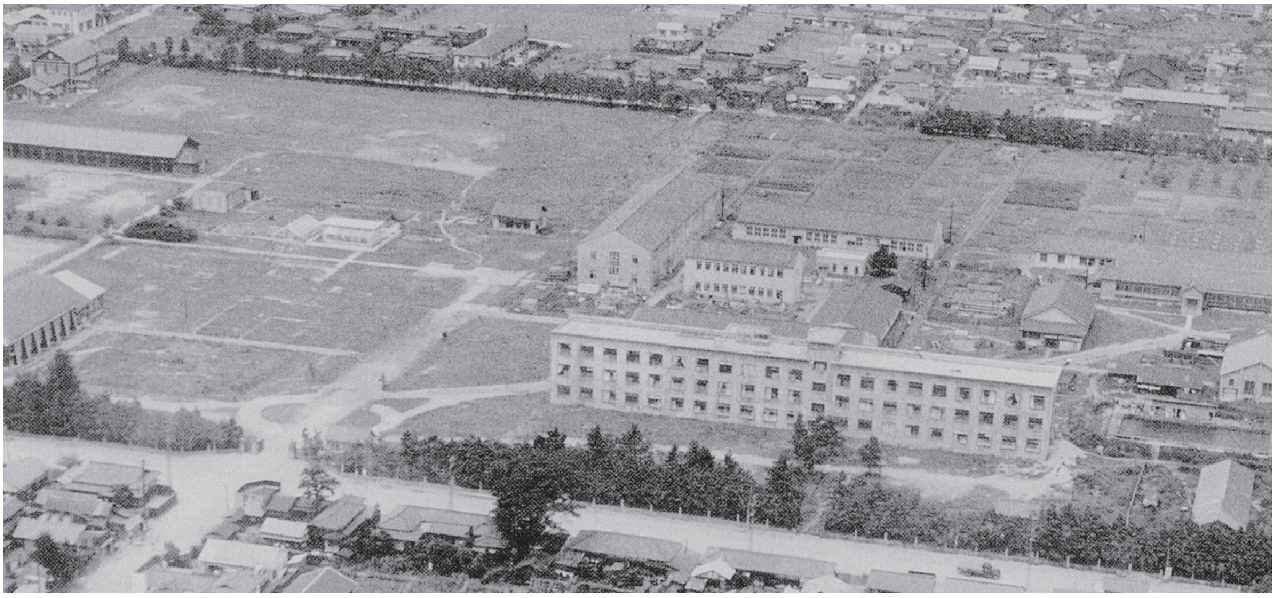
雨宮キャンパスは以前は「北六番丁」と呼ばれ、敷地はもとは北半分が田、南の方は荒れた野原で白い野ばらが咲いているような土地だったといいます。その地に片平から 1925 年（大正 14）に移転してきたのが旧制第二高等学校です。

校舎は、中央正面に管理部門・講堂・普通教室を含む囲み型の本館を据え、後方に特別教室棟をフィンガー状に配置していました。また運動場とともにラグビー場、野球場、卓球道場、バスケットボール場、剣道寮、武道寮、テニスコート、弓道場、射撃場、ボート用タンクといった様々な部活動施設が備えられ、充実した学生生活の場となっていました。

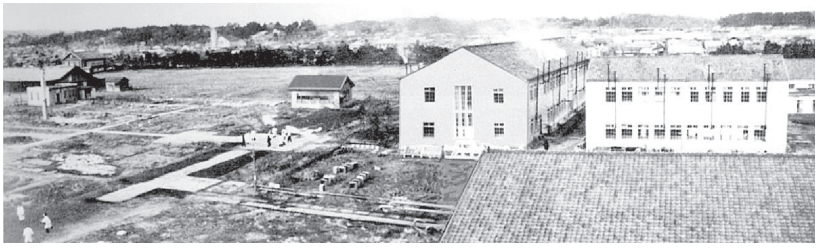
しかし次第に戦況が悪化する中、校舎の一部を陸軍二師団司令部が使用したり、工場化がなされ、さらに 1945 年 7 月の空襲によって校舎部分は焼け落ちてしまいます。壊滅的な被害を受けた二高は、三神峯にあった仙台陸軍幼年学校を代替の校舎として確保し、移転することとなりました。ただし北六番丁構内の東西部分は戦災をまぬがれたため、残された建物は戦後も利活用され続けます。

背景写真：1933 年（昭和 8）以前の北六番丁校舎講堂。1933 年に校舎正面に二高のシンボルである蜂章が掲げられるが、写真にはまだない。

東北大学農学部時代

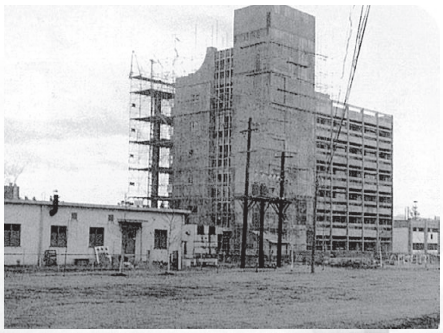


1956 年（昭和 31） 写真左下に正門があり、手前の建物が本館にあたる。右にはプールも確認できる。（『東北大学農学部五十年のあゆみ』）



1954 年（昭和 29） 亜炭ストーブ時代の煙突と未整地の校内。写真中央にあるのが 1 号館で、右手に 2 号館がある。本館から北の方角へ撮影したとみられる。1 号館左手にある車庫は現在門衛所の裏手（東側）に移動している。（『東北大学農学部三十五年のあゆみ』）

1965 年（昭和 40）4 月 9 日
正門付近で右手には門衛所と本館。



1972 年（昭和 47） 第一研究棟の工事風景。
左下にはズートロン室。（『東北大学農学部五十年のあゆみ』）

1982 年（昭和 57）2 月
移転直前の如春寮（東北大学女子寮）旧館。雨宮キャンパスの西北に位置していた。

戦後、二高の跡地の約半分はすでに宮城県第一女子高等学校が借りており、敷地をめぐる紆余曲折を経つつ 1949 年（昭和 24）に雨宮キャンパスが農学部建設用地に決定、翌年片平キャンパスで間借りしていた農学研究所からの移転が本格化します。当初戦災の焼跡が生々しく残り、元二高の武道場が講義室、卓球道場が事務室…といった具合に急場しのぎの校舎で講義が始まりましたが、鉄筋コンクリート建築にしたいとの要望を受け、中央道路より東へ 3 棟をならべて建てる建設計画で 1952 年以降、校舎が次々と建てられていきました。

また 1971 年以降には、新たに農学部建物将来計画が構想され、中央道路の西側に 3 棟を建設、5 学科が全部収容でき、図書館、動物舎、その他付属施設の全てを配置する設計となります。その第一弾として 1972 年に第 1 研究棟がパワーセンターとともに建設され、さらに第 2 研究棟、講義棟、管理棟（以上 1973 年完成）、厚生施設（1976）、図書館農学分館（1979）などが完成していきました。

背景写真：1970 ～ 1980 年代の正門付近

資料の公開について

◇個人資料

①佐藤丑次郎文書

佐藤丑次郎（元法文学部教授、初代法文学部長）旧蔵の絵葉書で、知人から佐藤が受信した絵葉書と、佐藤が留守中の家族に送った絵葉書とが含まれています。受信絵葉書は佐藤のヨーロッパ留学中に知人から受信したものや在外留学中の知人から送られたものが含まれ、いずれも20世紀初頭における帝国大学教授のネットワークを知ることが出来る貴重な資料です。

②生物学教室　昭和44年大学紛争資料

本学理学部生物学科の卒業生で東北大学医療技術短期大学部教授を務めた大脇頼子氏より寄贈を受けた昭和44年（1969）の大学紛争に関連する資料です。東北大学において学生団体、教職員団体、大学側が各々作成し、配布あるいは掲示等を行ったビラ、冊子、告示の資料や、学生運動とそれに対する大学の対応、労働運動に関する資料および当時の新聞記事などで構成されています。

③柳尾武義文書

本学工学部卒業生で金属材料研究所助手を務めた柳尾武義氏から寄贈された1969～1980年の間の学生運動・労働運動に関する資料です。柳尾氏が学生・大学院生および助手として運動に携わった際の関係資料で、各種ビラや新聞スクラップ、メモなどが含まれます。

④渋谷陽三文書

東北大学の元事務職員の渋谷陽三氏が在職中に入手した大学紛争その他に関わる資料群です。昭和37年（1962）から59年（1984）までの間に配布された評議会資料や議事録、広報、学生の製作したビラ等で構成され、青葉山移転問題、1969年の教養部棟封鎖、原子核工学科問題に関する資料が含まれます。

⑤吉岡孝治郎関係資料

吉岡孝治郎（元東北大学附属図書館司書）の書簡と葉書で、特に1953年（昭和28）７月20～25日開催の第一回国際医学図書館会議（於ロンドン）への出席を兼ねた英米旅行の期間中に作成されたものが豊富に残されています。宛先の大半は家族と図書館関係者、東北大学関係者となります。

⑥佐々木靖章文書

佐々木靖章は、1963年（昭和38）に東北大学文学部を卒業し、茨城大学教授として活動した人物で、専門は日本近代文学や国語教育です。1912年～2003年までの東北大学関係及び旧制第二高等学校関係の資料（全53点）からなります。

史料館のうごき（2016年９月～2017年２月）

◇博物館実習を受け入れました（９月12日～16日）

東北大学総合学術博物館、東北大学植物園および当館で担当している「博物館実習Ⅵ」の一環として、今年も受講生11名が当館で実習を行いました。実習で学生たちは、当館の企画展の展示準備として、展示事物の撤収・梱包作業や展示物を説明するキャプション文案の作成、また実際の展示作業も体験しました。さらに広報実習としてSNS等を活用した展示情報の発信案を検討・議論し、会期中に当館のSNSにて学生たちが作成した文案を発信しました。

◇法人文書の書庫移転を行いました（2016年11月～2017年２月）

本年度新たに片平キャンパス内に新書庫が設けられ、当館で所蔵している主に部局の法人文書を中心に移転を行いました。11月～12月に書架と遮光設備および空調工事を施し、段ボールにして約350箱分の文書を２月に移転させました。

◇第５回大学アーカイブズセミナーを開催しました（２月27日）

前年から引き続き「黒田チカの生涯―最初の女子学生の教育・研究・人間・社会」研究会との共催として、「「黒田チカ資料」の可能性２」と題するセミナーを開催しました。永田英明氏（東北大学史料館）が「黒田チカ資料の整理と黒田チカ資料目録」、志賀祐紀氏（奈良女子大学大学院）が「金山らく資料から見た黒田チカ」、黒田光太郎氏（九州産業大学）が「黒田チカの生涯―総括を兼ねて―」というテーマで報告を行いました。

◇星寮のおひな様を特別公開しました（２月16日～３月９日）

東北大学病院の看護師寮「星寮」で飾られていた「星寮のおひな様」の特別公開を当館第１展示室にて行いました。

◇新公開資料速報展を行いました（１月30日～）

第21回「紛争の時代の記録―吉田震太郎文書より―」、および第22回「初代法文学部長の留学―佐藤丑次郎旧蔵絵葉書集から―」を当館第２企画展示室にて行いました。

企画展を開催しました

◇東北大学史料館企画展「学都仙台を支えた天財―斎藤報恩会と東北大学―」

2016 年 9 月 30 日（金）～ 2016 年 12 月 27 日（火）　東北大学史料館第 2 企画展示室

斎藤報恩会は、資産家として全国に名を知られた斎藤善右衛門有成が 1923 年（大正 12）に設立した財団法人です。その莫大な財産を「神の使命により依託されたる人類の共有財産たる一部」である「天財」ととらえ、「人類の幸福に提供」する事を目的にされたこの財団が、最も中核的な事業としたのが、東北地方の様々な研究者に対する学術助成事業でした。

誕生してまだ日が浅い「東北帝国大学」とそこに集まった学者たちは、この斎藤報恩会からの支援をもとに学問の府としての環境を整え、またそれを足がかりに、国際レベルの研究成果を生み出していきます。同時に報恩会の助成は、東北地方や仙台といった足下の地域を対象とする研究にも向けられ、地域の学術文化や地域社会の発展にも役立てられてきました。斎藤報恩会のこうした様々な学術・文化事業そのものにも、東北大学の関係者が深く関わりを持ち、これをサポートし続けてきました。

今回の展示会では、この斎藤報恩会からの寄贈資料のお披露目も兼ねて、斎藤報恩会の歴史的役割を特に戦前期を中心に、東北大学との関わりという視点からご紹介しました。その誕生から深く関わった小倉博（法文学部助教授）や畑井新喜司（理学部教授）の足跡、実際に行われた学術助成の具体的な内容についても人文・社会科学や自然科学系の研究を網羅する形で展示しました。

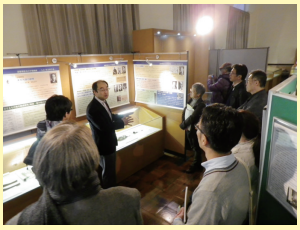
◇企画展公開講座「学都仙台と斎藤報恩会」

2016 年 11 月 3 日（木／祝）　東北大学片平北門会館 2 階エスパス

今回の企画展に関連する公開講座を文化の日に開催し、総勢 50 名近い市民の方々が参加されました。まず米澤晋彦氏（出雲科学館）に「東北帝国大学と斎藤報恩会」という題目で、続いて菅野正道氏（仙台市博物館）に「仙台の郷土史研究と斎藤報恩会」と題してご講演いただき、いずれも多角的な視点で斎藤報恩会の事業や資料をご紹介下さったことで、報恩会の全体像に触れる有意義な機会となりました。

◇ギャラリー・トーク

公開講座を開催後、約 1 時間にわたり各担当職員による展示解説を行いました。こちらも多数ご参加くださり盛況なものとなりました。



東北大学史料館だより 第26号 2017年3月15日発行

編集・発行　東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1　TEL 022-217-5040　FAX 022-217-4998

E-mail desk-tua@grp.tohoku.ac.jp　URL http://www2.archives.tohoku.ac.jp/　Twitter @T_U_Archives